へ 13
34 11
02

曲亭主人編述

八犬傳 第九輯 下帙下 套中下

柳川重信繪畫

文溪堂精刊

八犬傳第九輯下帙下套之中後序

知ざるハ知也。人生れて耳目の及ぶ所物として知ざるハ無し。其理を極めく。智ハ知也。人生れて耳目の及ぶ所物として知ざるハ無し。其理を極めく。是を辨ぜるハ知ざれば。智の要を為さず。格物致知ハ則学者の先務也雖然是を知る而已なく。慧ある者ハ悟るハ由なく。才ある者ハ智を致さるべ。故ハ智慧と云。才智と云。佛説ハ所云般若ハ智慧也。智と慧と具足なく。悟るべく致さるべを才と云。智慧も亦大なる哉。蓋智と慧と。相佐けく用を做さ。譬ハ人の身ハ魂と魄と有るが如し。魂ハ則心神也。魄ハ則神系也。人の心の欲する所。魄の資助ハ為ざれば。を動ー足を運ー。動静云為坐臥行止一も其如意なるべ。智慧と才幹と相佐けく。善致さるも是理なるを知る而已。然るハ智ハ上智あり。邪智あり。上智ハ。良善の事ハ用ひく。毫も奸悪の事ハ移らず。進退必度ハ稱ふく。動くといへども跌

ふぞ。是を賢才睿智とふ才い智の亜る者也。是を以難一毛。才多く智多れい。則下愚る。又邪智い奸悪の事ふ用ひて。仁義の心る。進むを知らく退くを知ら思ふぞ。動くとえい人ふ害あり。奸民盗児の才あるハヨく是る。或い又良知ふ一七心正く博く学びるく奇才あれども。命凶ふ用ひられず。且勢利ふ附るぞ。富貴を羨まぞ。同好同志の友稀れ。但のあ一色の聖賢を師と一友として。隱居放言春日秋夜を長一とせば。常ふ書を著して。其智を龍ふ表ふ者あり。元の四維無貫中。清の李笠翁是ふ庶と世紹。是よりの下。唐山ゆく云稗官者流。園俗の云戯作者是る。そ中ふ彼大筆と陋筆あるい。猶白狐と野狐あり。桂も柴も一勝ふ人見て並く狐と呼べども。白狐い野狐の野ふ遊ぶぞ。功徳無功徳殊れば。然るを柱ふ膠せる村学究九。玉と石とを擇ばるせば。或い那才と忌。或い彼名を媚む者。其書の出るを待く毎ふ遊ふ眉をうち顰めて是ふ。

かくの如く学問あるぞ。何とく儒ふなりて章句を誦一。子弟ふ教て真の道を説へざるや。只是意匠を費一紙筆を費一。ヨく梓束ふ災一く世を誣ひ俗を惑せる。是憎むべ一。厭ふべ一。と嗤くも間これあり。是ふ。い腐乱の偏見而已。蓋博く学得く。退く戯墨ふ遊ぶ彼大筆る作者ハ。然ら。大凡経籍詞章の学びハ。和漢の先哲。叮寧ふ注疏一て。学者を教道すくのく世俗を皆教と厭ふく。無用の空言を欺び。或い又奇を好そ。人の好を聴ふく欲にあるりく達者の戯墨ふ遊ぶるを。事を凡近ふ取く。誼を勸懲ふ発一。空言以塵俗の惑ひを覚る者。水滸西遊三国演義平山冷燕両婚史傳の五奇書あり。文章巧致至奇至妙。其深意を推考れば。則齊諧を鼻祖として反く三教の旨ふ違ふぞ。釋氏の所謂善巧方便五百の阿羅漢二十五の菩薩も功徳ふ伯仲もとらふとも過くらとも。べく。ぞ。それども水滸の如ハ。彼土る具眼の

者もよく其深意を悟るべし。況や此土の俗客婦幼の漢文俗語を一行も讀ぶべきにあらざれば通俗解詁の一書ありて其書舶來して久しくなるも猶ほ其趣を覘ふ由なし。只俗客婦幼のこゝろをさぐる戲墨を事とせる名人達もよく唐山の俗語を讀ぶに師とするを否を知らず。吾其冊子を一卷だに取て閲せざれば。但作者の用心は寧勸懲の二字にあり。然るを徭姓を上日とせる者時好に媚時好に稱ふく。書肆の鄙を賑はせるは吾美ざる所なり。因て昨の非を知るとあり。寛政文化の間に吾戲墨なる臭冊子てふ合卷物の画本あり。と恥ぢて去年に五吾舊作なる寒八犬傳の冊子の画を更めて恣に飜刻して新板と偽り記せり。あるいは吾是を詰りて新板の二字を削らせたれども其書肆今茲も亦懲りずして文化三年丙寅の春出る吾舊作大師河原桂子話てふ画冊子を又恣に再板して本文の画を減じ端像二頁を附增て像賛をさし書加え詞書をも增減して画は舊刻に由らず事皆恣にして是を新板と偽り記せしを告る者あるより速に其偽を外めて云云とのいせかども素より利の為に理義を辨知る良烏滸の癡漢なれば只強情を事として亟に美服せざるを恥ぢる僻事とせるとも久しく世に貼るべくもあらず。三十五年前の舊作なれば今の婦幼は欺れて新板と思ふもあるべし。又吾舊作なる物の本をヨメく藏める壯佼達はゆゑとなくも必知るべし。然るを一時の瞋怒に乘じて彼烏滸人の已が自恣傍若無人なる

理義も廉恥も辨知る所なきねく懲さんい大人氣なりと思ひ棄てあせざれども実に是憎むべし。彼も此も吾虚名を衒り知らず戯墨人くるる烈い名聯をも誣て賣らく島滸の僻事を見もせずも表面うるさくよ本傳既に末二巻六回に亦ふ速ふ局を結びて四方の看官に彼杣木樵る斧の柄の朽ちを知せまく欲りも然でも老眼衰眺して編述不如意なりくれば爰に戯墨の筆を絶つべ。鄙に画工佐藤正持が武北の旅舍ゆく八犬士を画がき贈り来せし題きる歌

根ねひとつの葉まきいやのふあく露のあいふたどひて玉とあり貫る栗と安房とい同訓ゆく

盧生が云夢い五十年。又吾戯墨も五十年。只一炊の隙なりで。嗚呼久しく哉吾衰へさ。五十年思い寐の腹稿将に盡さまくも後序に代る口狀い老の詩言なり。

ぐーとて飽れやまむ已るむ。

天保十一年陽月

蓑笠漁隱

○三十六の巻（初丁右七行）小説傳記（記い奇の誤字なり。當に傳奇に作べし）同巻（初丁左六行）遺憾（遺い遺の誤字なり）同巻（二丁ノ右十行）南柯夢（夢い夢の誤字なり）同巻（初丁左五行）李達（達い逵の誤字なり）同巻（廿四丁左一行）金時（金い公の誤字なり。當に公時に作べし）同巻（廿四丁左三行）徳用も堅削（傍訓のけいけんのりくるん）同巻（初丁左五行）李達（達い逵の誤字なり）

○三十七の巻（初丁右九行）左纏の締頭（誤字なり）同巻（三丁左三行）喊の聲（喊の畫）同巻（五丁右三行）旌と達（達い建の誤字）

○三十八の巻（三丁右三行）下聞（下問に作べ）同巻（六丁左九行）北魏八十餘萬（北魏い秦主の誤字なり。足れらい誤甚）

○三十九の巻（十丁左八行）天士（傍訓の一）同巻（十七丁右七行）隣（隣い隣の誤字なり）同巻（十九丁左初行）麻衣夏衣の誤字。処くに（京い東の誤字なり）

○四十九の巻（八丁左十行）老荘四個（荘い壮の誤字なり）同巻（廿五丁左九行）親兵衛が歸京（京い東の誤字なり）

との他聊なるい巻毎に又云二十六の巻初丁右の七行に見える毛鶴山い聲山なるべ。

一知音いの老眼衰眺校閲如意ならで。作書の稿本寫本刻本まで校訂の時毎に婦幼に讀せて是を問くのに誤寫誤刀を訂ぶ由なり。今般も訛字ヨるべ。　再校抄録終

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目録

巻之四十壹

第百六十七回　奔馬逐北犬江籠暴雛禽
再戰場親兵衛會五知己

第百六十八回　衝突三陣靈豬奏再功
報答舊恩戍孝全前言

巻之四十貳

第百六十九回　拾出野坑親兵衛受賜
掃除風葉諸勇士立談

第百七十回　神藥施得敵兵再生
現八拔箭活水死將

巻之四十三

第百七十一回　操神變伏姫華猶子初陣
謁舊君信乃詳父祖忠義

巻之四十四

第百七十二回　定正水路行大兵
音音江中燒一船

第百七十三回　借數艘大角拄義武
建降旗豊俊愚定正

第百七十四回　萬里一水道節射小仇
八百八人毛野麈大敵

巻之四十五

第百七十五回　南彌六顯靈祐子禮儀失時時有爲

第百七十六回　禍福反覆三士同功追兵屢逼忠臣拯主

右第百七十六回以上爲下帙下編中。以下爲下。共陸續刊行。當至結局大團圓云。

巻之四十六

第百七十七回　一顆智玉途懲一騎驕將四個保質反捉兩個保質

第百七十八回　有種雪恥復歸鄉黨大水陸濟度衆鬼

巻之四十七

第百七十九回　照文歸東房總尋福東西和睦兩國開津

第百八十回　義成重賞功臣妻八女信隆還任舊城免罪過

巻之四十八

第百八十勝回　孤龍貽化石丶大蟬脫八行反璧八行傳十世

回外剩筆　頭陀話説枕中四十八城稗史大成本傳二十七年

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目録終

性美而名
亦艶冶是
佳人後身
愚山人
潤就鳥羊古内
美容
振照俱教二
八紘

梶原石平二
景純
長尾太郎
爲景

三浦陸奥守
義同
沖の石を
内あけ
新みちを
たべるうち
のちれ夜の月
半閑人
三浦暴二郎
義武

非是
輸
之鼠
當爲知
之狗
信天翁
酒光羽
二四的寄合
五郎
須々利壇五
郎
人物頭倡刀

臨難苟不
免尾礫場
片玉葱韮
中蕙蘭
蓑笠漁隱
河堀刀祢
かいろうとの
箕畏源兵衛
石綱

のあまのやそぢ
めくりは書のかぐく
人手をせぬ
名みのくさぢ
曲亭陳人
山鳩たまと
里見次麿
實亮さとうぐまる

里見八犬傳。一百八十一回。以多歲苦樂將盡稿。因而自贊曰。知吾者。其唯八犬傳歟。不知吾者。其唯八犬傳歟。傳傳可知可知。傳可癡可知。上傳以下十言讀以音敗鼓亦藏草以做良醫

辛丑孟春　七十五翁蓑笠又戲識

南總里見八犬傳第九輯巻之四十

東都　曲亭主人編次

第百六十七回

奔馬北から逐て犬江親兵衛雜舍を篭まを再戰場ゆ親兵衛五知己ゆ會を再說犬江親兵衛。長尾景春の堅陣を。一瞬間の殺頹あく。逃るを誘さそ迂ふ程ゆ政木大全姥雪代四郎直塚紀二六石亀次圓大越卿三向水五十二大枝獨鈷素ゑ吉漕地喜勘太大江の賊兵ら及伴當まるまで勝ゆ乘たる勢こ劇ち。皆後れとそ相從へ義通の先鋒の頭人振照俱教二弘經も力疲ゆ撓まで兵を找ゆ。奔馬ゆ鞭を鳴ゝけ。當下亦義通もみづら敵を迂んそ馬を其方へ乘向ゆへ辰相急ゆ走らせ來ち。馬ゆ閃ゝと下立て。主の轡ゆ推ゆりそ。料ざりける中途の勍敵鬨戰難戈ゆ逮び折諫其名を呼知りさる。政木孝嗣とや

らンが義旗の援けまゝ是ぞ汐ぐこそ幸ひなるを又思ひうけざり。京師より大江親兵衛が折ふくの地へかゝるまゝ。然も勍敵景春を伐敗走らせ。是十二分の御利運ゐいなぎも。然るを飽ぎ思食く。漫ゐ逃るを迂ひめぐ。窮猫狗児を儿破る。害るゝ〜ぎも量りくさかり。疾岡山へ還らせの。意ゐ長尾景春が其隊の兵を〻〻〻〻。這路條へ出く来るゐ岡山の御陣ゐ戍兵寡を。他風く少知りく攻含まく欲せ去ゆゐいるゐ那里ゐ君の知召を如く。國府臺と相對ひく涯るゐ前所河。そのく義る。要害の地ゆくいゑ。倘敵ゐ据られるべ。臺の城も後竟ゐ守りかくやいるむ。とく還せ。せめかと理り切く諫ーかゞ。義通ゐ景春の敗れ走りを。迂も果さぐ中途より還んとの本意るゐねど。豫父君の嚴命ゐく。身の後見ゐ隷られる。家の老の諫言を。吹ぎらんいさんゆく。信乃現八ぞゐ聞戰の安危什麽と左ゐ右ゐ今も心ゐかれども。現岡山を喪ゐ。後悔其甲斐なゐ。べ。と思ひ復して默然ゐ。當下東六郎辰

相ゐ士卒を整歸陣を示ゐく。倶ゐ義通ゐ相倶ゐく。岡の陣営ゐ返ゐ入ゐ。自家の刀瘡児ゐ潤就鳥ゐ古内を首ゐく士卒ゐヨゐくこれゐ。ども。皆幸ひゐ窮所を外れく。死ゐ至る者ゐ。ゐ辰相則雜兵數十名ゐ相早せく。臺の城へ遣ゐ。介程ゐ大江親兵衛ゐ自家の士卒ゐ先ゐく。来ゐる名馬青海波の蹄ゐ信せそ其馬直ゐ敵を迂ゐ。ゐ急ゐりけれ。既ゐ迫ゐ退ゐ去れる。長尾景春の一軍ゐ大郎為景殿ゐ。五百個の士卒を領て。後陣ゐ在り。今迂近つく大江親兵衛の小勢ゐるを見ゐへて。冷笑ひく毫も謀ゐぎ枯苦花ゐと深ゐ処ゐ銃ゐの歩兵を両三名伏置く。敵ゐ落さぜんと構ゐ。ゐ退口の草伏ゐく。迂来ゐる敵の猛將勇士を。殺ゐ捕ゐべゐ為ゐる。親兵衛ゐ駛く猜ゐれゐ。敵ゐ臨ゐて今ゐ止るべゐ勢ひなゐ。ゐ況や名馬青海波の疾と飛鳥ゐ弥増ゐれゐ。憶ゐぎ近くゐ隨ゐ那草伏の歩兵ゐ。ゐ枯苦花の裏ゐ。ゐ火蓋ゐ鑽て撞と發せる。銃砲の窺ひ皆

錯く那身ふ中らぎ。怪ー蜚ぐ。以ある哉八犬士ハ各身と衛る靈王あり。然おおの時親兵衛が。胸邊より粲然ーる。靈光両二道晃めき出く。那歩兵ども眼底射ければ。歩兵ども。ハ憶ぎも。吐嗟とだるふ銃砲と捨て驚ぎ立ハ程ふ五十二天素ゑ吉胞弟兄ハ倶ふ長械を挾ミく走りそあるふ事ふけると。親兵衛馬上ふ見ゑて。及よ那奴ども。饒ーみせそとのたまふ早く五十二太素ゑ吉あるふると。長械と倉ゑ直ちに向ひ悍く勇る勢ひふ中るべくもあらぬれば逃んとせーを走らせぎ。胞弟兄長械振閃めーく。件の二個の敵兵と。矢場ふ殴ぎ仆ーけ。其間ふ犬江親兵衛ハ馬を敵中へ乗入れく。群立つ敵の衆兵を。鎗りて三ヨく薙仆を一騎の奮ふ男四下と拂ふく。縦横ふ尋ふ駈破れば長尾の士卒驚ぎ怕れく。憶ぎも逃走ぎ。長尾為景怒りふ堪ぎ士卒と罵る聲も烈ーく。獨馬上ふ親兵衛と。鎗を合せく。一上一下とゑを畫ぎ。少年ゑれども。猶勇ふく。堅を摧く本事あり。武藝足らざるふあらねども。然とく犬江ふ敵ー沼んや。鎗法漸々ふ衰へく。既ふ危く見ゑ。為景の老黨近ヨ日十名許返ー来り。主を援けて。親兵衛と。駁ん。と競ふ程ーもあらせぎ。政木孝嗣。姚雪與保。五十二太ども。隊の乾児の毎齊一吆と走り来り。推隔相拄ゑく。六七人ふ痍を負せ。残る二人を五十三太ども。械の冴ゑぎ。斃ーける。當下犬江親兵衛ハ既ふ疲れー。為景と。刺さぎ一鎗ふ殺ぎ。素より仁慈の本性ゑれば。猶一雲妻時疲労せく。怯むと沼ふと。横ふ拂へば為景ハ鎗と持ぎ。馬より。撞と。雜ふ落されく。俯平張りて。蟠ふく。身を起さんと。掙れと。親兵衛。透さぎ。馬上より。鎗倉直ー。幹當りく。為景ハ背を押ゑく。毫も動せぎー。為景ハ面と赤うーて。耶と。聲ゑけく。幾番欲反起ちく。欲ぎるふ。辟言ハ千曳の石とそ。壓ふ。措ーどくゑ。喘も出ぎるふけり。浩処ふ直塚紀二六ゑ。漕地喜勘太以下ゑ。伴當及五個の。野兵と。倶ふ走りくゑふ来ふければ。親兵衛ヤヤと。野兵を。喚て。頤

親兵衛
馬上平
為景を
摘ふを
ゐるげ

志乃之湯

りく虜児を指示せば殺伐多い唯々と応も果ぜ下男ども為景ふ緊ゑく索を
掛ふける然び長尾の士卒们ハ或ハ殺され或ハ落亡く四下ふ敵のあらぶるーゑ親兵
衛ハ孝嗣次國太郎二名志もあゝで剰ひ五十三太素ゑ吉其毎さへ義通君ふ従
ひまろく這戦場ふ在ると見て且訝り且欺びく躍て馬より下ゑ程ふ振照俱
教二弘經ハ東六郎辰相の指揮ふ依ゑ一千有餘の隊の兵と新参の野武士二四
的寄舎五郎須々利壇五郎並ふ其従兵六十餘名と相共ふ又親兵衛と相援
んとく今稍あふ事ゑければ親兵衛ハ孝嗣们ふ面談を先図ゑく隨即俱教二
们を迎へ労ひく却剛才ゑの地方ゑく敵の殿の隊長を擒ふ做ゑ一事の顛末を
箇様々々と告知せく又ゑ為ゑ我豫ゑく人の噂ふ知り故長尾景春の家子ふ
太郎為景と喚做ゑ少年ゑれども胆勇ゑく武藝十二分の本事ゑりゑ人ゑ
意ふ今我生拘ゑる勇少年ハ必是為景ゑゝむ和殿ハ他と牽せ還ゑゑの

我と呼え上ゑれ我ハ舊友政木大全们ふ料ゑも再會の情義を殿ゑて伴ゑく
御陣へまゑゑん景春遠く逃亡ゑれば這里ふヨ兵ゑ益ゑ隊の兵ゑ皆俱ー玉
ひゑとゑふ弘經敬服ゑて且差ゑく答ゑる車職ゑハ和殿と昨今ゑ對面今を
始ゑれども其武畧勇敢の今古ふ獨歩ゑゑりハ豫ゑーふ違ざりける和殿のゑハ
犬塚犬飼俱ふ是豪傑の士ゑく萬人の敵とゑつべし其儔ゑゑゑーゑ車職ゑハ
手筈の細人驥附の功と欲ゑるゑゑ嗔の鬨戰ふ散ゑゑ隊の兵亟ふ聚合ざり
ゑば後の戰ひふゑゑゑゑゑーハ面ゑゑゑゑゑと勸解ゑば寄舎五壇五郎も亦共
侶ふゑゑ枕て遲参の罪ゑゑ謝ーふける當下俱教二又ゑゑ今ハ當所ふ要ゑーと
ても車職ゑ預ゑゑゑく牧て来ふける隊の兵を送ゑく俱ーくゑゑゑゑゑ上の御上日ふ
違ふゑ仮ゑゑ景春愛子の生拘れと雖ゑゑ怨ふ堪ぎーて途より返ーゑゑゑ
是も亦知るべゑゑ車職ハ二三百個の雑兵を従へく其生口を牽せて退ゑゑの

義を饒したまへと。請ふを親兵衛曰く。否とよ。閑戰の勝負は隊伍の多少に依るものあり。機に臨みて変に応じて其進むと脱兎の如く其退くと処女の似く。未戰に安危を知る者は必勝なりと。然れども上の御意とあるを。推辞まつらんは最も畏し。今こゝに隊兵五百を留めて其餘は俱して退りぬべきもの。されば上の御意を悖らじ。彼も分れば越度なりと。諭すを俱教二強難て竟に其議に任せて。精兵五百名を拔出して。是を親兵衛に遣與し。従せて。却孝嗣次國太郎二人の大素る吉们に名對面して。今日の義戰を叮嚀に労ひ謝して且親兵衛に鈴びを。舒くて儘為景を受合りて隊の兵に牽せて隊伍齊整と馬をとめて暴河原なる岡山を投く退りけり。亦程に大江親兵衛は猶恩ふ〜あれば暇兵二名を召よせて事低々と吩咐れば。皆あるく直走りに葛西の〜に赴けける。低く又親兵衛は喜勘太に吩咐て敵の棄る草柵と五六枚

を取て主客の坐を儲く。然而孝嗣們を請ひ坐らせて。其身も坐して對面せ登時親兵衛の為に料らざりける。政木主石亀師弟向水弟兄悉もあるべしと愛〜に就中訝しきは政木主の三人の上なりでも考るに今茲四月某の日に和殿名三名は結城なる左右川橋を渡りも果て敵の連發ち出る鐵砲に撃墜されて推流されて狂沈て終後に求獵れども知るよしなければ我のみならで義兄弟も七大都て最惜く。今に至て忘る時なし。館も少し召て最忝く御諚あるに然れば又我們八人は結城よりかつさに故あり穂北なる落船の宿所に居る程もなく館より大師父と御使も稲村へ召させゆゑに恩遇孰も浅らずして中に我仁は京師へ使を奉て七月の下旬より那地に在り。館の願せのまゝ如く。徴向は最も畏し朝廷より我們八人に姓氏を賜らく金碗宿禰と称まされ。低過分に歎あれば不測の憂ひるに。ふゝ。管領政元主の計ひ稟て。副使に参りて。蛮崎十一

郎ふのこ。身の暇を賜りて我身の還ること能はざれば。伴當くける那姥雪代四郎吏と蛮崎の若黨直塚紀二六と雑兵五名と若黨奴隷六七名倶ふ京師ふ淹留あり。前月廿四五日時候まぐ同ト憂ふ沈くく在りーふ我両館の御盛德と諸神諸菩薩伏姫神の冥助ふ依りてうけん虎妖對治の功とりく稍厄釋て主僕皆還ることをえらーふ路ゆく愛馬走帆の病て客舎ふ斃れしが是ものの故ふ又日と費ーて稍信濃路ふ来ける程ふ我君不慮の軍旅の風聲漸々ふ真ふて鎌倉の両管領諸將を連ね兵を合せく安房上総を攻畧まくもとふ事の趣空えーふ驚ふく去向をいそぐふ上毛より東ふ新関あるて過ふことを沁ぎ只得間道を尋索めく今朝ふも武藏豊嶋ふ千住河まで来ふける折鄙ふ稲村の城内ふ廐ふ繋ぎ在せる元此名馬青海波の苛くも河をうち渉ーて這方へ来ふ逢ーふ訝りふ思ひけ便宜ふあれば航て這馬ふうち乘て千住河を渉る程ふ姥雪直塚雑兵若黨奴隷の毎ふ或い馬の尾ふ縋り或い連枷ふ身を浮ーて泅ぎ前面の岸ふ届るふ料らざりける小敵あり戰ひ勝て降参の折其姓名を肇て尋知る即野武士の頭領ゆく其里ふ侍る寄舎五郎と壇五郎名乞原是當家ふ帰服の情願めり是ふよりて青海波の来歴も粗知ーふ一隊を従へく馬の足掻ふ儘せて心ともなく御曹司の御危戰の折ふ騎着く勍敵長尾景春と芝拂ひて復這里ふ再戰の勝を汲く和殿名五個の蒼頭識ふ再會の歓びあり我上ハ先かくの如ー和殿並ふ石亀師弟の再生い故ーてあらめいふ

ぞやいふぞと問ふ孝嗣次國大名いゆえ側聞せ向水枝獨鉆ふ隊の壯佼名も又二四的須々利の兵毎五百有餘個の軍兵まで皆駭然と舌を巻く奇談ふ感嘆きりけ姑且ーて孝嗣ふ親兵衛ふ向ひくらく通愛ふ和君の高運妙用自然ふ稱ひーふ忠心義胆の致ふ所神佛の冥助ふ但感心といえい烏滸ゆく並く

敬服の外いつぎ就く我们三人の上いかでも去る四月の時候俱に和君に従ひ奉り那日結城に届る時和君の歩の及ばければ一町ばかり後れて左右川と唱へる野水に架る把橋を渡らんく程に誰とい知ぬ發出る幾十艇の銃砲に撃るるまでに沈まで我もあやぶまれとへば鄭三咱等も同容是より後のゆくへも哥々具に説ぬ一ねとのたまふ傍を見られい五十三太含矢點頭て却小可弟兄に関宿に船果て時結城へ伴て饒されば口得船を漕退けく家路を投て還るめり遂に憾さに堪ざれば家弟素々吉と商量さらく和郎いかに思ひやらん曩に大江和子に値遇せしより乾児们と共侶に水路と上總まで送るあれ〻素藤とらんと對治せしく戰場へ伴れ来僅に落人を搦捕く賞禄に米を賜る恵て又大江和子い友人三名を伴ふく結城の法會に赴くと伺へ我们又是を送て水路を関宿まで送るく法會の伴て饒されば勿論辛苦錢とく金幾枚を恵れ〻と銭財い咱等の本意にあらず俗罪雑の戰場菩薩の法會其伴にも省れて阿容々そとしてかのいかんへ恥赫灸に事ゆく乾児们に侮られん我聞関宿より柴船の結城へ暢ふ小流あり急流なれども廣くして其地々々の荘家に用水に乏しきあるに故に巨舫い漕容ることを泛ざれども幸ひにく今日我船い快船なれば易くてんでに結城へ赴く躱れて法會を見て退られたの議什麼と談ぜれば〻素々吉語と續く小可是をもて聴く开に最要ある主張へ和子に知れて叱らるとも分説いかでもあらん然らば又蛇く遺復せとく猛可に舵を含て更へく又関宿へ漕戻せ程に既にして日の暮れ〻ば得那里に船を歌く其夜の明るを俟とへ五十三太却听の低而次の日の早天より那枝流へ船を漕入れく結城を投く泝るに川幅のと陜くて流急ければ船舊まぎ或る左右の岸に繁

ア立る樹の枝ゝ掩れて去向見えざる処あり。或ハ流減く船涂くく。竿を使ふ事
ゝ処あり。其頭ハ素ゑ吉を岸ゝ渉せく。船を曳せく溯るゝ。然るでも猶蔦ゝ折ゝ
第兄水ゝ下立く。船を肩擔ぎく辛くく。推のそ遣ると幾町ゝけ。怪る辛苦ゝ
時移りく。日長ゝ四月のかゝもるく。結城へ尚三里もあるべくんと思ふ比。日影ハ既ゝ斜ゝ
るゝ心連りゝ焦燥ゝ。其頭ハ特ゝ流険くて。せん術もなく折ゝらと見れば人の浮屍
骸一人ゝ三人まで。船ゝ歌りく流れもゆぎ。噫忌々。と呟ゝく。竿ゝて突流さ
まく欲ゝ。細流ハ遣も反らぬ。只得又素ゑ吉ハ呟ゝく。湍ゝ下立て竿ゝて
其死骸を突流さまくせ。程ゝ忽地一聲苦と叫ぶを。小可吟く驚く。ふく衣を
脱捨て下立く。又其浮屍骸をよく見るゝ。果して是政木主と石亀屋の乾父
乾児人詳ゝくも亦痛ゝ相識達三人まで。怪る横死ゝ。胸後れてさてもくとだ
くゝ小可も亦ゝ。ふく二個の屍骸を左右ゝく。皆船へ曳無せて見れば。孰も身

體ゝ銃瘡三五ヶ所ゝあり。されども猶幸ゝ。面部胸腹ゝ。その窮所ゝ。只是膈と
脚のみ。然る故ゝ三人倶ゝ死ゝ。ふく見れども胸膈ハ温ゝく。推ば動脈ゝ
似ゝ。原来ゝ。ふく死絶ざる。疾水と吐せよく。一個々々ゝ舷へ推樹て。倒ゝて腹を
推ゝ。孰も吐く水と吐きゝ。ふく氣息ゝ。登時小可素ゑ吉と商量を
ゝ。その人々ハ昨日関宿ゝく相別れ。ふく犬江主ゝ伴れて。結城の法會ゝ赴けば
んゝ皆痍を負ゝく。水ゝ陷りゝ。必是故ゝ。我意ゝ。今日那里ゝ不測の
禍鬼起ゝ。ふく聞詩ゝ及び。倘果して。ふく犬江主の安危心許ゝ。
然ばとて。這九死一生ゝ三人をゝ。棄ゝ。陸を走りく結城へくとも。只其安危を知
るのみゝく。鄙語ゝ云。宣嘩果ゝ杖三昧ゝ。ゝ事ゝ益ゝ。ゝそ反て大
江主ゝ恨られん。呼詮船を漕戻して。宿所へ還りて。その人々を活さば。結城の安
危も知れん。女々ゝくりのと思んや。とゝ。ゝ働と見られば。素ゑ吉詞を受接て。愚

見めて簡中準えれば艇く船と漕戻さ。急流の降舫は其勢ひ剣ふ似ぎ射
箭の如く又軸ければ其曛昏ふ関宿まで戻りて猶も力と勁せく通宵漕ぎく
ぬく程ふ其詰朝両国河原ふ。宿所へ帰着ぬーぶ政木主们二人の為ふ醫師と
招ぎ療治と請ふく膏薬を打せ湯剤を薦るれ死も果ぎ活もせぎ。あの比又小豆ぃ
悄地ふ結城へ赴ぎて和君達の安危と扮るふ。那里の風聲隱れもあるぎ。那一正寺の
悪住持徳用結城の家臣長城枕介惴利堅名衆司經稜根生野飛倭大素
頼们ぎ。法會と乱妨の事且件の僧俗奸虐人们ハ皆八犬士ふ撃ぎ懲されて活恥と
曝せ一多又八犬士と、大庵主ハ反く結城殿ふ参られて。那里と退りぬ。
筋縮りく起居不自由ぎりければ垂籠くのみ在ーぎりとのふを卒二天又續て倭
二伏の夏過く。秋八九月ふぎりー時候安房より来ける商船ふ。八犬士達の上洛

談問ひくふ今いーも八人ぎぐ。里見殿ふ仕まりて。瀧田の城内ふ在り。開ぎ中ふ大江主ハ士
月の比使を奉りく京師へ赴ぎぬ。その時三個の客人達ハ舊疵皆ぎぐり
ぎ。食ぎくみ脚自由ふ走行も生平ふ異ぎるぎりぬーぎ。咱等第兄折々薦ぎぐ。
安房へ赴ぎく。里見殿ふ仕ぎ那里ふ大士達の在るえれば事成ぎぬーとのふ。政木主
も石亀叟も倶ふ云云と意表と演て従ふぐもふ。我家ふ歌舞
ぎく在りとも開ぎ獻ーぬふりねども素より富る我身ぎりれば銭ぎく米ぎく做海
折々ハ反く這個の客人達の盤纏と費ーー米と買せ養ぎる日もまりぬとのふを
孝嗣咲ーて禁めく親兵衛ふ告ぎる。我们三名ぎ薄命ぎる且再生の事の顛
末ハ目今這弟兄ぎ口状ふ具ぎるぬ然ハ是等の趣をいぎ和君ふ告ぎやと思ふの
ぎ。百夏果るまで痍愈ざれば筆も把られぎ又七月の比より歌和君ハ京師へ使ーく。
安房ふ在ぎと歩えーば歸藩の便宜と待のみゆく。向水等ぎ義侠の幇助ふ我

のまゝ石亀殿さへ心わもあ〜成長逗留〜く。做きるもるくありけるが今番里見家
危窮の軍役敵い則扇谷山内の両管領ゆく大軍水陸より攻伐まくもと
云檄文を市ふ掲げく隠もあ〜ぶゆえ〜ぶ咱殿ふ石亀殿もう驚ぶて
人ふ問へど。和君ハ京より還れりやいまごろやと誰も知らず絶てなり〜ふ本月の
五日ふ至りく扇谷の間諜児の安房よりかゝる来るあり原是向水の乾児なれば
五十三大隨即他を哄誘して両敵の必事を揚るふ犬江王ハ京よりのまゝ還ぶ
ふの他大阪ハ軍師ゆく六犬士ハ防禦使ゆ寄隊ハ則箇様々々と水陸の隊配を
咀ふ説示さゝふ函府臺の寄隊の大将ハ山内顕定主と足利成氏主と両旗を
副将ハ山内憲房主ハ両隊の軍兵六萬餘騎実ハ四萬有餘るべ。今朝ふも
五十子の城より發向して亀蟻ふ陣をとゝ〜ぶ咱殿ふの義を伺少て猛可ふ主人
弟兄と石亀師弟を閑室ふ聚合く密談あるゆ那犬江ハ我恩人ハ仆るふ

京師ハ使して今番の大事ふ逢ぶるゝぶ朽惜く思ふべ〜ん我今那人ふ成も代
ゆく里見殿の御為ふいゝぶ一臂の力を盡して那恩義ふ報ふべ。恁ハ扇谷
殿ハ是我崔昌君ハ既ふ恩怨地と易く雠敵ふ為ゆくも那隊ふ向て弓を矢ふ
箭を飛さえハ我本意ふ〜ぶ咱殿ふ函府臺ハ寄隊の大将顕定父子と成氏王
ふハ我亦ふる恩義ふ義もあ〜ぶ況や函府臺の城ふ里見義通君大将ゆ防禦
使大塚大飼ふ城と出て寄隊の大軍を逆るとふ〜ぶ然ふ尤便宜の地ふ
先ゆ那里ハ赴ぶて時分ふ料り変ふ応て里見ハ援けて寄隊を敗らんふの義什
麼と談ぶれば石亀師弟向水弟兄悦び勇ぶ他議ふ及ぶ。主人ハ悄地ふ乾児
義子ふ徇示〜ゆ集合るふ僅ふ半日許の程ふ来會ふ為る自家の壮佼六十餘
名ふ及びけゝと告るゆ次囲大受續て却小可ハ越路の市人悍く勇る物部の八十
宇治河の瀬ふ立ゆど少ふ時ふ角觝と好ふて老ても侠氣耗ねぬゆ始ハ犬田犬

川主ふ知られまつり〜欽びあり其後淫婦奸夫ふ誣られて身ハ罪なき罪人ふ做
やく牢獄ふ繫れしふ鄭三がもてるもく犬阪主の救ひを仰く罪を免まし欽びあり。
其後又両国河原ゆく御身ふ値遇ゆひしより政木主と共侶ふ館山の城攻ゆ又
結城の法會ゆ伴れる欽びあり〜ふ左右川橋ゆ必死の大尼向水弟兄の資助ふよりて
再生の欽び四度ふ及べども〜安房へ行もて御身ハ格另大田大川大阪主ゆを
告ぐり〜ハ今政木主の云云と陳ト〜ゆ情由ふれ〜ば饒さゆ人〜と倍話まび
亦鄭三ゆ舒る日詛と孝嗣い推禁めく又ゆ〜ふ犬江主ゆ〜我両敵の勝負と覘
ひしふ昨日まで〜ハ闘戦互角の〜ゆあり這暁ふ至りて〜ハ寄隊の三将戦車と焼まそ。
敗績ゆと告る者あり。仍るふ長尾景春ハ那三将の隊ふ附ゆ今朝〜も猛ふ
旗を建て岡山のもへ赴くを我ゆ知りて思ふ〜ゆ景春一箇の隊兵をゆて岡山の
かへ推寄まるゆ那里の空虚を覘ひ知りく攻合まく欲まるゆ〜ん倘那疆を奪ひ

畧れゆ臺の城の大害と悄地ふ後ふ跟て彷く機ふ臨ゆて轂破らんと思心を
我衆ふ告て悄地ふ彷そ来ふけるよ豈討んや義通君の一軍ハ中途ふ景春ふ相
逢ゆ〜他兵を雑へ野戦あり里見の士卒勇るふ〜ねど景春も亦然る者る
ゆ〜ハ風く士卒を三隊ふ分て義通君の備在ゆ其隊をみづから轂ゆ乱〜く闘戦
難義ふ見えゆ〜ば咱ゆ孤軍の壯佼們をりく景春を相拒えく力戦時を移せ
かども我隊兵ゆ侠客のゆそ軍陣ゆ熟る者ゆく且戎衣も器械も真物真剣
ゆるぐれば勝と合ゆること難ゆ〜ふ折よく和君の馳着ゆひく一瞬間ふ景春を敗ゆ
走らゆ〜ゆ〜ゆ上ふ再戦の獲さへあり〜ふ我黨の及ばゆ所雲と壤と異ゆ〜ゆ感
服至極ふ〜と祝せば代四郎紀二六們黙兵伴當ハ〜ゆ〜ん寄舎五壇五と其
隊の兵ゆハ耳新〜ゆ心地〜ゆ〜ふの人ふ〜て這友あり寔ふ〜ゆ〜ゆ〜と〜ゆ者ゆ〜ゆ
當下犬江親兵衛ハ甲乙の會話をつらくと〜ゆ果て且欽び答ゆ〜ゆ命芽出〜ゆ和

殿堂の再會我のみをもて大阪大山大川大田自餘の大士も鈍び必等しかるべ。以ゐる
哉政木主は是忠孝の俊傑之又石亀の義俠ゐ且鄭三ゞ其師ゐ孝順ゐ又
五十二太素ゐ士ゞ善ゐ與して任俠ゐ積善餘慶の天助虎ゝ〻ぞ或縲縄の
寃屈ゐ陷れらるゝ白刃頭ゐ蒞むとへども或は不測の敵の矢丸ゐ斃れて急河ゐ
陷ちるとへども其死を起し生ゐ回ゐ及びて乙甲を救せ丙を丁を援けむ
因あり縁あり同忠同義造化の默契妙ゐ哉政木生は曩ゐ我ゞ素藤對治の
日ゆゑ戰功あり〻只管奉仕を薦めゝども猶云云と意衷を演て從ふべもあら
ざるゐ今日は又咱ゐ代りゐ御曹司の危ゐ野戰を援けまゐて勍敵長尾
景春を防ぎ林ゆ挿ぎ実ゐ一人當千刄又石亀師弟向水枝獨鈷弟兄
ゞ其徒と共侶ゐ政木生ゐ從ふゐ當家の為ゐ忠戰始あり終あり其舊縁を
推もとへば皆是里見の家臣ゐ同じ主の義を以ゆえ上ゐ

御曹司いまゐ両館義実義成を以ゐ御感大ゐ〻で恩禄子孫ゐ偽ゐ日夫宣足ゐ
賀ぜべ賀ぜべと連りゐ感嘆ゐ〻ける浩処ゐ鄕ゐ大江親兵衛ゞ野兵二名ゐ吟
咱ゐ敵の去向を見て來よゐ遣しける其兵毎走りかつ來ゐ跪居て親兵衛ゐ
生ゐるゐ小可毎ゐ命せられしゐ敵將長尾景春ゞ敗れ走りし迹を尋ねて葛西の
かゐ赴ゐひゐ景春は戰ひ敗れゐ北走ると遥ゐ〻ゐ旗を建て散ぜしゐる
士卒の集ゐを待ゐ一雲時の程ゐ皆聚合ゐて其兵又三千有餘ゐ做ゐ有徒程ゐ
其子為景の殘兵の數ゐ漏されゐゞ幾名狭逃かゐ來て事徒ゞと告ゐゞ景春聞ゐ
驚ゐて且怒り且怨ゐ堪ぜ隊長ゐ直江宇佐美梶原樋口等を遽く召近つけて為景の
ゐ留様ゞゞと告知せて且ゐ我憤ゐ獨立の志ある故ゐ山内の隊ゐ附ぜ獨岡山の壘を襲
ふて臺の城を拔ゐ欲ゐ計較風く齟齬ゐ乳の臭耗ゐ義通ゐ戰ひ負ゐ〻ゐ今番
為景は初陣ゐゐ漫ゐ血氣の男と負ゐ〻みゐ殿ゐ〻れば〻那小猴子犬江ゐ

らンが辱ふ値ふけめ。我子と敵ふ虜ふせられて。阿容々々として恁くのごあるべ。許我山内ふ失れん。先や今亦推寄せて。犬江と殺して。義通を捕へて怨と復さふあるぞ。生く二たび還るべからぬぞ。とく〳〵せよと。敦圍に暴く軍扇をのく。膝うち鳴らして。臂を張り眼を瞪ら〳〵。連らふ焦燥く威勢ふ隊長毎へ諫難て。猛可ふ下知と。徇へて。馬ゆヨヲく豆草と飼せ。士卒ふ皆腰戰飯と使せて。急ふ人馬を調へけり。却小可ぢふ敵の雜兵ふうち雜りく。景春の身邊まで。紛れ入ることを。とく〳〵見ふ。ひと詞ひとく注進ふ。親兵衛ハさもあるとあり。とでうち答て。頷くのを。騭ぐ氣色ハうりけり。

第百六十八回

一二陣を衝突して。靈豬再功を奏す　舊恩と報答して戍孝前言を全うす

登時二個の覇兵。ぢ景春二たび推寄せ来べとふ。注進を側聞せる。姥雪氏四郎以下の衆兵。直塚紀二六。漕地喜勘太。石亀次圓。大越鄰三。向水五十三。大枝獨鈷素ふ吉須々利壇五三四的。寄舎五郎ぢふ至るまで。皆愕然と目を注あるく。胸安うぐぞ思ひける。斗ぐ中ハ政木大全孝嗣ハ。敢驚く色もなく。徐ふ親兵衛ふ向ひて。いかう浅智の論辯。助言ふ似く。憚りるよ。ひるとも。敵ハ敗られて再取ふる。猶三千の雄兵ハ。自家ハ僅ふ五六百ぢ。而も疲労れ。士卒をりて。怒氣奮ふ男。始ふ倍せる敵と逆へて。野戰ぜば。恐らく勝と難ふべ。誠ふ愚案ふひへとも。怒る者ハ誘ひ易ふ。今奇兵をりて他と征せば。一戰必勝疑ふなべ。這頭ふハ敏素拉る。冬樹の蔭ハ。今在下ふ隊兵と分らく。二三百名を授けゆ。埋伏して敵と敗らんとの。毛甚麼と請問へば。親兵衛頭を歌けて。其策ふ紀ふあく。称ど古の聖王の不從を征ーゆくを思ふ正路ふ就く。奇兵をりてせば。湯の桀を放ち。武王の紂を誅ー。如ハ王者の軍とのひつべ。然ハ後の世とふとへとも。賢君有道の正兵をりく。那乱虐を鎮るふ方てハ。亦當ふかくの如くるべ。我嘗富山ふ在と

時姫神授與の陣法なり。孫子の八門遁甲の陣是なり。蜀漢の諸葛武侯なく
あの陣を布設てりく昭烈の危窮を救ひ〻び那里の俗い是を孔明が八陣とも又
八卦の陣ともいふ。其陣法い箇様々々と即地ふ畫き孝嗣並ふ頭人等ふ
教示あく又曰ふ。今あふ在る隊の兵ふ振照俱教二の分ち一者五百名五十二太が
従類六千名二四的須々利の従兵六十餘名都て六百二四十名なるべ。今是を八
十餘名づ八ふ分て八門を守らあむべ。這一門毎の隊長い政木生姥雪叟と直塚
須々利二四的五十三太素ふ吉と我と八名ふ足れりとす其進退ふ我這軍扇を
りく指揮せ皆よく我ふ従ふく。景春と摘ふもべ。景春倘あの陣をよく知りく。
東方生死の門より入て北方五鬼の死門を突破り又生門より出るべ其間戰
互角ふ成む他知ぎして死門より入ば囊の物を探るが如く必一人ふも漏さべ。我又
景春。あの陣を知ぎとも他ふ亦然る者ふれば其機を査し且疑て戰ぎして退ぐ。

只緩やふ是を迂べし。必急ふ追撃ふべ。他我迂ふ遲ぎを見て焦燥く
急ふ反し合せて二七三十一ふ突りく蒐ら胡意輕く戰ふく詭り敗れて走べ。却
我五個の野兵と喜勘太郎の伴當い始よりて八陣の備ふ曾いく各鋏砲城
携く這頭ふ故りる並松の中枝ふ躲れて登り居て敵の進退を張ふべ。倘我後棄の
如く景春八陣を突ぎして反て我詭ふて敗れ走ると迂ふてあの処ふ至りるべ遣り過して
後陣ふる敵の馬を撃ふ仆ね景春是ふ驚ぎて慌く退んと為る時我急ふ引返して
其ふ乘ると攻撃ふ勝ぎとふとあべ。大家あの意を知よかと言叮寧ふ説ふせば
衆兵都て感服して指揮ふ従ふそ中ふ孝嗣い殊更ふ親兵備が宏論智計ふく
きもく敬服して。かの如ぎ少年い和漢今昔一人の後の世も類あるべ。と感て敵を
俟ふけり。尓程ふ長尾景春い二ふび犬江親兵備と死戰して擒ふせられ其子為景を
こり復さんと思ひ惴れる怒ふ堪ねば毫も擬議せずぐ真先ふ馬を找る左ふ樋口

小二郎維龍あり。右ふ梶原後平二景澄あり直江莊司包道と宇佐美三郎職政ふ。其後陣ふ続く軍兵約三千餘名天ふも掩ふ勢ひ。故の戰場を投く返し。多つ為景ゞ事あり。い這里ふけりと吟く隨ふ景春い馬を駐めて。ふれゞ敵ふ退く。一町許前面ふあり。隊長い那犬江ふ。我又推寄ぬるを吟知らる欽布儲る陣の光景最奇く。敷ゞ所ふよゞ似ふ其為体八方ふ八流の楮幡を建て其下ふ軍兵ヨヲくあり。壁ゞ八箇の陣門あり。て開閉時ふく四方相當り四隅よく守ゞ如ふ。但隱々とて雲霧の其四下ふ起弁りく。推包むあやあんとゞ怪ーふる景春見ると稍久ーふあり。急ふ左右を見々ゞく景澄維龍ふ。若他をふ恵ふ。我聞唐山古昔の陣法ふ諸葛孔明ゞ八陣あり。何ふや我ふゞ学ひゞ。ふも其八陣い攻伐ゞ者生門よりふ入ゞ。又生門よりふ出ゞ。必失あり。とふ。那陣這ふ似ふあらゞ。縱八陣ふゞ。那八犬の奴们いよく幻術を約ふとふ。今厭勝の法とのそせゞ漫ふ敷ゞ。他ゞ圍ふ。ふの故ふ我又憶ふ。今戰ゞて退ゞ。敵い必隊を乱ーゞ。其逼ゞ引受て。自家意ふ建更て。推包て。拗ゞ。他い小勢ゞ我い大勢ゞ。那大江奴を擒ふせんと。枝ふ果実を挑ゞ如ゞ。又蛛く後陣へ。他へよ。と。自尊蟲ゆ。て。説示せゞ。景澄維龍感佩して。隨即包道職政ふ下知を。他へゞ後陣ふ退せゞ。引返せを。親兵衛見つふ。笑て。然ゞとあれ。思ーとよ。景春果て。我陣を疑ふく。是を敷ゞ。又徒ふ退ゞ去ゞ。必我隊を乱ーて。迂逼ゞを敷ゞん為ゞん。謀計ーゞふ。皆緩やふ。赴ふべーとく。隊を乱ゞ。徐々と。是を迂へゞ。敢逼ゞ。間近くふとゞ。五十三太素ふ吉。乾兒们と。俱ふ。罵りふ。笑ふく。小石を抓て擲ゞ。景春見々て。怒ふ。沼堪ゞ。那奴们我を怕れゞて。近ふ。迂ふ。敷ゞ。て。侮り。遊ぶ。投石三昧ふ。那期ふ至ゞ。疾駈向ふく。衂ふせん。兵毎返せと。呼ふ。乘ふ馬を推旋らて。鎗挾ゞて。敵ふ向ふ。景

澄維龍ハべけらえ惴雄の壮佼等。近習外様の差別なく、倶に怒に堪ざれバ、咄と嘷て
駈向ふを。政木孝嗣向水枝獨鈷須々利二四的其毎も共侶に敵を拄えて且戰ひ。
胡意敗れて乱れ走れバ。親兵衛代四郎紀二六等も獵場の獸の列卒縄を踰るが如く
馬に鞭ち。足に信せて逃走るを。景春ハ猶漏さじとて隊兵を找めて息をも續れず那
里までもと赶ふ程に。後より向く敵の銃音連發てる程なるに長尾の騎馬武者五
六名斃れて人馬共侶に象棋倒になりしかバ。是にぞ驚く諸軍兵将帥士卒並て
皆胆を潰しつ吐嗟と叫びて謀ずに乱るゝ癖なれバ。後なる敵を見も定めず潑と頽れて
逃走れバ。豫期しゝ大江の隊の兵齊一咄と執て返しゝ中るに任して斃し仆せバ。敵ハ
いよ〳〵度を失ふて盧滅なして馬に踏まるゝ果敢なく命を殞すもありけり。其が中に樋口
小二郎維龍ハ。いかで主将を延さんと思へバ。一騎敵に中りて鎗の尖頭に血を濺ぐ。力
戰ふ時移るまで。なほ先途と挑みしを。政木孝嗣遙に見て。適敵やと嘆賞して。

鎗挾ミて走り来て名告かけつ刺んと找めバ。維龍鎗をうち振り且扱て馬を駝寄
遣差へて。一上一下と挑ミ戰ふ迭の武藝劣らず優らず他雜もせで死を争ふ勇
悍對応せざるにあらねど。維龍ハ數度の闘戰に疲労れて眼や眩みけん。孝嗣が閃め
かす鎗を拂ひ果ず。遑なく鎧の透を刺串れて馬より撲と落しかバ。孝嗣ハ其首級を
捕ざりしバ。馬をのミ分捕にして牽駐めつゝうち乗りて猶も敵をぞ赶ふたりける。浩る程に
長尾景春ハ乱れて走る自家の士卒を禁めもあへず共侶に馬の足掻に信せつゝ。脆く
も二たび敗績なるを。須々利壇五郎二四的寄舎五郎ハ手下の野武士十人許と共に旗
簇と赶蒐きつ喚禁め罵辱めて。推捕篭て斃さんと競ふを。長尾の近習五六名返
し合せて防ぎ戰ふ音も劇しく剣戟鎗棒寡をもて衆に敵しかたなる長尾の近習ハ
痍を負ぬもなく二人ハ寄舎五壇五郎の鎗に縫れて仆れしかバ。景春怒りに堪ずして
馬を馳入れ且と下も鎗尖鋭かりければ。只於の一騎に駈乱されて痛痍に仆ゆ者ヨヌク

まだ寄舎五郎も壇五郎も倶に景春に中り難く或ハ肩尖高股を刺れて殿肉坐に仰反るあり。浩処に政木孝嗣姥雪與保直塚紀二六石亀次團太越鄭三重見の士卒四五百名と倶に景春を赶蒐て走り近づく多勢の敵に免れ難く思ふ折から直江包道宍佐美職政残兵二百餘名を将て主将を索て返し来て推蒐る敵を受禁て入乱れつ戦へバ景春ハ今ぞ虎口を士卒に譲りて退きつ馬の喘を休る程に梶原後平二景澄も残兵二十名許を将て主を索て返し来て景春を見て身邊近く馬を駆よせ礼を做て詞急迫しく諫るやう思ふ由も似ざりける今日の闘戦機を失ふて郎君擒にならせ給ひては君亦陣歿なさらば長尾の家ハ断絶せんとの義を思しめさずや。卒ぶん伴仕らんと共も読らず鞭を揚て景春が乗たる馬の尻を礙と撻しかバ馬ハ撻まぞ甚鶩直に葛西のかたへ走りゆく後方に従ふ梶原景澄残兵も共侶に皆後れじと走る程に又赶近つて敵兵あり是則別人ならず大江親兵衛仁が向水五十三太

と枝獨鈷素手吉其隊の壮佼數千名を従へつ連りに馬を走らせ来れ景澄ハ得残兵を留めて敵を防がせて是より主従僅に二騎汗なる馬に鞭ちて逃るを親兵衛仁と見て他ハ必景春なるんと思へバ敵の残兵を五十三太们ぶちに任せて這小輩を見るより馬に拍れ敵中へ乗入れつ又馳脱て遥に延る二騎の敵を走らせじとて赶蒐る馬ハ名に負ふ青海波の駿足なれバ射る箭の如く一瞬間に近づく随に四下に响く聲震立て景春返せ仁なるぞ大江を知ずや逢し返せと喚りつ鎗を拈く駆よする然しも勇士の威勢に中るべうもあらざれど景澄ハ主を鞍せと思ふ心を鬼になしつ只得馬を乗施らして矢聲を發つ親兵衛と鎗を交へて戦ふ程に景春ハ大江が本事を既に是より知りぬ勝とかてし思ひしが今景澄が他と戦ふや不可やと見もかへらで走る馬に鞭を中て命を涯りに落しけり尓程に梶原後平二景澄ハ大江親兵衛と戦ふ事いまだ久しからずして腕衰へ鎗法乱れて既に危く做り

右時景澄の従父昆弟なる萩野五九郎泰儀と呼ばる壮士なるも亦景春の往
方を索ねて料らずも来りあはれば今景澄が敵と闘戰の危殆を見て立ち
戻を擬
説せば馬を馳寄せ相援けて挾み殺さまくまるふ親兵衛い物ともせず精神を
加りて右ふ中り左を拂ふ神出鬼没の嫖姚ふ景澄泰儀驚怕れて倶ふ
引外し馬を退けて鐙を鳴らして逃走らるを親兵衛い猶逃さじと心とも
なく自家の衆ふ離れて迫ふ葛西る冬枯野邊まで赴ふてけり。話分両
頭。その朝犬塚信乃犬飼現八杉倉武者助田税力助等い寄隊の三将
顕定成氏憲房の總軍既ふ敗績して乱れ走るを赴蒐ふて葛西ふ假名
町より半里許這方る林原の頭まで又寄隊の三将と再戰の事の趣い既ふ前
回ふ見えたり然が信乃们ふ僅ふ二三千の小兵なれども地理を揣り切所ふ据りて
戰へば破られぎ又寄隊の三将い一旦敗軍の残燼なれども猶三萬餘の士卒あれば

先度の恥を雪んとそ三面齊一競ふのみ。未牌の時候ふるまでも雌雄を分ぎ
ずして顕定頻ふ焦燥て屢軍使を走らせて左右の二将ふ謀り合せて三面一度ふ
火箭を飛して信乃現八们が竜りる茂林を焼まく欲まるふ白石重勝及隊
長等ようやのみを嘗りて士卒ふ下知して火茱を集め既ふ数百枝の火箭を
一度ふ射出さんとまる程ふ今朝より烈しく吹く風ふ鈍くも火線を吹合られて其
火反て四下る。枯草ふ移りて弓なりけり雑兵们ふ什麼とぞりふ驚
慌く倶ふ其火を撲滅さんとそ或い鎗或い棒を執ふ儘せて枯茅萱を捷び
憶ぎ打出ぎ茅萱の裏ふ獣あり是則別物なりて鄙ふ牙ふ蕉火を結着ら
まく戰車を焼て大猪數も減らぎ六十五頭忽焉として前後左右る高萱枯
草踏開ぎ顕れ出て雑兵を牙ふ掛て投飛せば弥驚く衆兵隊長主将も
倶ふ胸を潰して野猪を殺して火を消留とと喚ど叫へど届ぬ下知と怪異ふ乱る

三面一禍の野豬い皆咸暴れ嗜りく。又只寄隊の騎馬武者の馬足を牙もて突折けば人馬俯累りく死るもあり。然るぬい野火ふ逼られく身を焦して叫ぶもあり。信乃現八等ハ是を見て能び勇ざる者ゐく。直元逸友三面一致の隊兵を找めて攻入なる。中央ハ大塚信乃並ゑ真間井樅二郎勇士猛卒前後を爭ふ勢ひ究破竹の如く。今日顕定を擒ふ做さぞい何の時を待んと。縱横無礙ふ斬る敬ぬ。然るも乱れ寄隊の衆兵野豬ゑ驚れ野火ふ赶れて恥を思ふ雑兵ゐ皆四零八落ふ逃て跡ゐく。ゐ中ふ白石城介重勝い先鋒の頭人霧布五六といくく主君を後安く退陣させんとの思ひふ残兵四五千を推圍めく。程ゑ死ぬ野火を避て。信乃が一隊と血戰ゐ其勇ゐ死ゑ。あるねぐも寄隊の士卒ハ皆胆落て透もあらぬ逃まく思ふ紐裏ゐ魚鱉ふ似られば敢戰ふ擬勢ゐく。僅ふ一千許ゐ犬塚が隊の兵ふ數ゐ破られ立脚もゐく事急ゐるい敵ふ加りて。友く自家を射るもあ

り。白石霧生防ぐふ甲斐ゐ。俱ゑ馬を射ゐ疲を負ひ。ゐ逃る士卒ふ。雑ゐく。迹を埋めく落亡けり。有佐り程ふ寄隊の副將山内五郎憲房ハ霊豬と野火の禍鬼ふ憶ぎも辟易て二ゑび總頓ふ。ゐまくせ折犬飼現八信道ハ継橋綿四郎喬梁と俱ゑ隊兵を推找めく。突然とて働く入る馬上の鎗頭向ふ前ゐ。剩野火と野豬ふ寄隊の士卒ハ彷ぐふ術ゐく。右往左往乱走ゐ這隊の頭人間牧野汝八夏盛と喚做ゐ猛者雁鳥烈衣八九郎と共侶ふ罵辱ゐ喚返て。馬を跳ゐ二騎相並く。眉尖刀ゐ。ゐく敵を艾る猛勢凄じく敢近く者ゐを現八ゐ好敵ゐ。と思ハば継橋喬梁と共侶ふ馬を。程ゑ鎗見めて。ゐ高ゐ程汝八八九郎ハ後ゐ。突ゐて来ゐ二三頭の野豬ふ馬の後脚を蒐られて。忽地樅と落ゑ。能ハ。ゐ思ひけん。痛楚を忍び身を起て。逃る雑兵ふ。ゐ交ゐく。蚊ゐ影を驅せゑ。現八見て。冷笑ひて

思ふ事も似ぬ白徒なりけりといへバ士卒も喬梁も憶ず哄と笑ひけり。然れバ山内憲房ハ
近習僅に五七名を従へて假名町の方へ落て行く程に現八を只一騎士卒に先ちて
赶蒐來り喉禁めて窘めて鎗を拈て嚏く蒐れバ憲房の近習們ハ已ことを得ず
敵を迎へて身をすてゝ振る刃の電光一騎の敵と侮りて倶に勇みしかひもなく。
皆現八が鎗下に仆るゝも有り俯せるもありて竟に羽翼を喪ひし。憲房ハ逃るゝ所
他逃さじと覺期の大刀風馬を馳よせ馳違せて。一霎時ハ挑戰ふもみだりし原
是婦人の手に生育て艱苦を知ず民情を甚ぞ心驕りて身ハ柔弱なる貴介
公子の如くにて大士の敵するに足る者ならねバ持る大刀を打落されて怯むを現八馬
乘よせて鞍橋を引着て宙に吊もて動さず四下を佗と見るゝ折から継橋綿四郎
喬梁ハ五百個許の士卒を將て馬を走らせて來るにければ現八ヤヤと喚近つけてやよ。
継橋生らの生口ハ寄隊の副將也多く竟く賓客なれバ身を暴くなせそ逃さで

かれ這が今乘捨る馬の鞍局に膝着て牽もて去りて疾郎君の御陣營へ參
らせよと云ふと喬梁欽び兼て馬より下りて士卒と倶に弱り果る憲房を抱き
と會り推縮めて件の馬にうち乘せて鞍を解きて十の字に緊しく縢げて又故の己が馬に
うち乘り。現八に欽びを述相別れて牽せて趣て義通君の陣所を投ていそぎける案
下。其の時寄手の一將足利成氏の一隊ハ那野火も飛翔らば又野猪の怪異もあるり
なりバ猶直元逸友等と連りに挑戰ふ程に猛可に自家の兩隊頭定憲房父
子の陣より亂れ譟ぎて敗績なりと呼えしかバ成氏うち驚きて則在村と新織素六に
件の父子を援けよとて隊兵を分ち遣しけるの故に成氏の士卒減少なりけり不識のよ
りよ勢ひなりて攻撃る事甚急く滸我の士卒ハ一二の陣の敗軍に氣力折けて艱なく
者勘らず其餘ハヨヨく落亡て成氏の旗下に相從ふ近臣股肱の毎なる科草七郎。
望見一郎是等を宗徒の精兵まで五六百名に過ぎざりしかバ成氏嗟嘆に堪ずして。

霊猪二くび
神力を見る

伏姫神霊

今ハも是ぜひ戰殺せんと麾うち揮て士卒を找めて敵の隊長杉倉武者助直元の一隊を逆へて推蒐る這時遲し那時速し颯と降し雪狂風ふ沙石を飛し樹枝を鳴らして天さへ暗くなる隨ふ走りのそ歩る一箇の野豬大に驚き疾く虎を似たる狡と思ふ可の猛威りく成氏の乘る馬を駈仆し主を滾して起んと蠢く甲の表帶を牙ふ引掛け背ふ載く往方も知ざるほけの然が今ハの光景を敵も自家の士卒们も正可ふ見て知る者なけれ只狂風ふ驚ろ怯れて活路をのみ索ぶ。

此ぐ双を交へ戰して勝負ハ既ふ決然なる直元逆友隊兵を找めて中るふ任せて斫仆せば敵兵ハ遂く逃亡て科草望見の黨のみ僅ふ陣歿ぬるけ。ふ程ふ横堀史在村新織帆大丈素彩ハ成氏の軍令ふ從ひて一二の陣の敗軍を援んと。五六千の隊兵を領ていそぐ程ふ顕定親子ハ戰ひ敗れて今ハ拯ふべくもあらず又後方を見ふれば我一陣も亦敗軍ぬ逮びけん自家なる士卒の落て来く後影ハ見えらば在村ハ嘆

口氣して馬を駐めて素彩を喚近つけて呟く。帆大丈和殿ハいふ思へる。そのこと。なぞ我陣も亦敗北の兆見えて我君ハ恙ぬや陣歿ぬ。狡知らねども左ても右ても三ぢの負を又建復をべくもあらず然るを猶恬て在らば必敵の俘ふ為ん。

滸我ぬ各宅眷あふ疾く彩て安危を揣らぶ後悔脣を咬んのみ。素彩ハ聽て聞道る千住けるこ。彩ハ聽て吟く賢慮寔ふ天の利あり然ぶ死伴仕ん。と応て躍て間道る千住けるこ。走く程ふ葛西の底不知野を過る時從ひ来る四五千の士卒ハ又蝕く落亡く。才ふ四個の鑣奴のみ今も猶馬前ふ在り。在村と素彩ハ倶ふ呆れてうち咥く心細さ涯。

ぞも為を迭ふ然ぶ面色して。好々負ぶ。那奴們ハ亡て結句優らぬ。とのふ。より外ふ術もなく見耳を限り遥る。ふの野をなく踰んとく。倶ふ馬をぞ早めける。

有恁程ふ大塚信乃ハ鄕ふ顕定を斃るも果さぬ走らぶ。とけ遂恨ふ堪ねば。自家の士卒ふ先んじて往方を索ねて。只一騎迂ぶ来る馬の左右ふ從ふ伴。

雑兵僅に五六名喘々と続いける。折から前面を見遣せば足掻を早めて二騎の落人あり。倶に兜を脱捨て皂裂の頭を裹める。一個は綿綉の戦袍を一個は則絳白の段々間道ある戦外套を被てうち相譚ひつゝ人馬の背骸五六町西に亦目あり。信乃いうち相て熟び不堪ぞ那錦繍の戦袍を被て落武者は必是山内の管領おのぞむんぞうむ。とのを従兵うち空て知る者あて告るもう不古。他は管領おのぞむ小可豫相記の戰袍被て落へ滸我の權宰横堀史在村と又戰外套は其次職を新織帆大夫素彩に紛れもあらじ。とへば信乃又欺びて仮へば亦是我仇ぞ。とのたまへども。服に残る二枝の表揮の征前拔き弓含直して馬を走らせ聲高に其里に落ぬく騎馬武者は滸我の佞臣横堀在村新織帆大夫素彩ぞ。我は是大塚信乃金碗成孝と若们奸佞邪智の本性曩に我を虐げ。捕まくせんのこゝろぞ。新織素彩を緝捕の頭人として我彩徳の客舎まで穿敷金ほとの

急ぎうければ。義士山林房八が我死に代り血深の衣は縄に為りて我背に在り。今そ復も舊恩舊怨思い知るやと喚れば在村素彩うち驚いて馬を駐めて見る処を能弯固めて彈と射る矢局差に素彩は左の耳とり頤まで貫深く射らきて叫び果て馬より墜て死んでけり是ぞ怕る在村は項を縮め泥障を蹴鳴て馬を馳て逃んとすを信乃は透さず迂蒐る馬の足掻も弥疾に弓弩前接速る弦响と共に横堀在村は項の邊を丁と射られて苦と叫び落もせず呂は鞍局に俯る儘に走れる馬に乗せられて死活は知ぞ做に又那四個の鑣奴は主よ先に逃立せと信乃は二度迂蒐るに矢種既に盡て只得従兵の續くを俟て持せ鎗を擬合て。若们は我に向て權且這里に居よかとのひ捨鞭をうち鳴して又在村を迂蒐け浩処に犬江親兵衛は郷高に長尾景春の隊長る梶原後平二景澄と荻野五九郎泰儀に親兵衛と戰ひ負て逃るを連

せいせん
征船を飛
あの
あくの信乃
うらみ
怨を復せ
あの
幾十山林
見一ツ紀

あの村

アヽ奸蔓る勢ひ已とゝ泛ざりゝゝ心ともなく葛西なる底不知野ゝ来ゝけるゝ這里ハ茫々くる曠野ゝ茅萱枯芒花弥々上ゝ腰ゝ没ちく路去り更ゝ地方なゝども逃る者ハ路を撰まゞ又奸ゝ者ハ青海波の駿足ゝ乗ゝれば荊棘延蔓れ野草ゝ物ともせゞ既ゝと親兵衛ハ両個の敵ゝ近つく隨ゝ逢ゝ返せと喚ゝけく敏ゝ枯草踏開く馬をのゝく跳らせく後れて馳る景澄の背を鎗ゝて刺ちく時怪むべゝゝの業取の敏ゝ々中ゝ最大なる坑あゝゝゝ知れば馬蹄を踏ゝ横けん人馬愕然と陷りく在りとも見えゞるゝゝ景澄是ゝ氣力を泛て馬乗返して鎗ゝてゝく刺殺さんと含直を倩る折ゝゝ犬塚信乃ハ猶も横堀在村を奸捕へんとゝ只管ゝ馬を走らゝゝる程ゝゝ見れば二騎の武者ゝれあゝ一騎ハ其両敵を奸ゝ者ゝくゝの地ゝ在るべゝとゝ思ざりけゝ犬江親兵衛ゝ似ゝゝゝゝ且訝り且驚びて それゝゝゝ疾とゝゝゝゝ聲を揮んと為る時其武者ハ忽馬と業隱る坑中へ人馬ゝゝく陷ゝゝ後れて走ゝ一騎の敵突然と返ゝ来ゝ鎗ゝく坑ゝ勍敵ゝ刺殺さんと馬を寄ゝゝ信乃ハ吐嗟と馬馳らせてやれ白人なゝ下ゝゝと罵ゝ鎗ゝ晃めゝゝく刺んと找ゝ景澄ゝ見て你ハ誰ゝと問せも果ゝ信乃答て你知ゝや我ハ是犬江親兵衛ゝ義兄弟里見殿の御内ゝ八犬士の一人ゝゝ犬塚信乃成孝ゝ原来好敵ゝゝ我ハ白井の隊長ゝゝ梶原後平二景澄是ゝ當の敵ゝゝゝ勝負を決せんゝゝと名告ゝ相吸ゝて鎗ゝ交ゝく戰ゝ程ゝ既ゝ迫ゝ逃延ゝる荻野五九郎泰儀ハ這光景ゝ見ゝゝく只得馬を乗復ゝ来ゝ又景澄ゝ力を勢せゝ連りゝ挑ゝ戰ゝゝ信乃ハ撓ゝ色もく左右ゝ敵ゝ受ゝゝ劇ゝく中ゝ鎗法ゝ両敵共ゝ腕乱れて引外さんとせゝ程ゝ泰儀ハ項ゝ刺れて馬ゝゝ仰さゝゝ隊ゝゝ景澄是ゝ驚馬怕れて透もあゝ逃まく要ゝ聊も其便りゝ後ゝ反て信乃ゝ小髪ゝ刺れて。ゝも赤馬ゝゝ墜ゝゝ登時信乃ハ両個の敵ゝ死活ゝ敢見ゝゝ坑の頭ゝ馬ゝ找ゝ聲

高ふ喚る中。方僅諗て。這坑へ隕り。騎馬武者ハ大江ゑゑべ。親兵衛ゑゑべ。志
ゆ我ハ犬塚信乃へ既ふ和殿の両敵ハ我鎗火のく刺滅ゑゑ。我這鎗の幹富ふ
携りて文蛇く出よりと告喚被ゑゑと両三番やそう鎗と坑中へ線下さまく做る程ふ怪む
べ。這坑中より起騰る白氣あり。隱々として煙の如く天ふ冲ると見る程。あらぎ又
忽雷と風雷の事く如ク音ゆえて。颯と吹出る猛風と共ふ大江親兵衛ハ人馬ひとて
抬出されゑ。聊も身ふ恙あらぎ馬も亦故の儘ゆく。主を無せ。端然と坑の
畔ふ立ゑゑ。信乃ハ二さび胆と洟ゑゑ且驚びふ堪ざり。眼を定め熟
視く。原来犬江恙ゑゑ不思議の面會ゑゑけるかゑ。昔我が德ゆく。和殿の
親の終焉ふ拙言ひ言の虚ゑゑく。今日果ゑ始の娘ゑさと報る言の葉ゆ
敏ク文の段特ふ長やゑゑ。又巻を易て下の回ふ解分ると聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十一終

拾七編之巻之四十一

松野勝若院